

19 PAC(個人別態度構造)¹分析²

末田清子

1. 本章の目的

本章の目的は3つあります。まず、PAC分析の特徴や理論的背景を学ぶことです。2つめは、PAC分析によってどのようにデータを収集し、どのようにデータを分析するかを、例をあげながらみていくことです。そして3つめにPAC分析をコミュニケーション学の研究に活用する意義について考え、課題を提示することです。

2. PAC分析

2.1. PAC分析とは?

PAC分析は、1990年代前半に日本の心理学者である内藤哲雄博士(現:信州大学教授)により開発されたもので、現在、臨床心理学、看護学、社会心理学、コミュニケーション学、教育学、日本語教育、平和学など諸分野にまで利用者の裾野が広がっています³。それでは、PAC分析とはどのような方法かみていきましょう。

2.2. PAC分析の特徴

PAC分析の特徴を簡単にまとめると以下の5点に集約できます。

まず1点めは、PAC分析は、「記述統計学と了解的解釈技法とが併用されている」(内藤, 2008, p.1)方法だということです。研究参加者が刺激文から自由に項目を連想し、それぞれの自由連想項目間のイメージ上の近さや遠さを数値で評定し、クラスター分析(多変量解析のひとつ)を行うという意味で量的研究です。同時に、一度デンドログラム(樹状図)が析出されると研究者と研究参加者が面接で相互補完的にデンドログラムを解釈していくという意味では質的研究です。

2点めは、PAC分析は研究目的にも臨床目的⁴にも使うことができるということです。本章では研究目的で使うことを前提に説明していきますが、コミュニケーション学において実践的な目的のために使用することもできると考えられます。たとえば、異文化コミュニケーションの分野で行われるトレーニングやコンサルティングでは、クライアントの抱

1 英語で Personal Attitude Construct といわれています。

2 本章および研究例の執筆にあたり、内藤哲雄先生から貴重なアドバイスを頂戴しました。厚く御礼申し上げます。

3 詳細は <http://www.wako.ac.jp/~itot/research/pac.htm> を参照してください。

4 臨床目的の使用については井上(1998)を参照してください。

えるニーズや問題点が何であるかを焦点化させる必要があります。そこでPAC分析を使用することにより、クライアントが意識している問題や潜在意識を焦点化すること⁵で問題の所在を明確にすることができるでしょう。

3点めは、研究者は自分自身の枠組みから研究参加者を理解するというのではなく、研究参加者の枠組みで研究参加者とその意味世界を理解することができるということです。たとえインタビューが自由度の高いものであったとしても、質問は研究者の枠組みで投げかけられますが、PAC分析においては、デンドログラムの項目自体が研究参加者の枠組みや意味世界を表しているといえます。また研究参加者の報告や解釈がデンドログラムに基づいているので、調査の再現性が高いといえます。

4点めは、PAC分析において研究参加者のデータ間の共通点や相違点をみていくことで、ある概念の構造的普遍性に迫ることができるということです。またそこでみられた変数の関係を見ることによって、仮説を構築することが可能です。

PAC分析が示すところの「個」を科学するというのはどのようなことを表しているのでしょうか？ PAC分析では「個」をみることは、すべての人に共通する部分と、その人の社会的属性に共通する部分と、その人独自の部分とがあり、独自性はこの3つの統合だと考えるということです。そしてある特定の個人のみにもみられる普遍性は個別的普遍性（内藤, 2002, p.10）と呼ばれ、他者と共通する普遍性は共通的普遍性（内藤, 2002, p.10）と呼ばれます。

たとえば、末田・蔡（1998, 1999）では、日本人と華人のデータには共通している部分もありましたし、明白に違う部分もありました。それが次の調査の出発点になり、仮説構築の手がかりにもなりました。また、末田（2001）においては、留学体験者に対して米国留学前と帰国後に米国のイメージ分析を行い、そのイメージの変化のあり方をみることや、その変化を研究参加者がどのように評価しているかを知ることで、留学体験の片鱗を垣間みることができました。それと同時に「イメージの変化」と「留学体験の意味づけ」という2つの変数間の関係について気づきを得ることができました。

5点めは、PAC分析で研究参加者が研究者の手助けでデンドログラムを解釈していく過程で、意識していなかったことや、研究参加者が向き合いたくないと思うようなことを露呈してしまうこともありえます。研究者は、研究参加者がいつでも調査のプロセスから撤退することができるという自由を尊重し、その後のデータ開示に対しても十分な倫理的配慮が求められます。

3. PAC分析のプロセス

PAC分析実施のプロセスの詳細や質問の仕方などについては、内藤（2002, 2008）を熟読することをおすすめします。ここでは実施例をあげながらPAC分析実施のプロセスを概観してみましょう。

3.1. コミュニケーション学のテーマ

3.1.1. テーマ確認

それでは、コミュニケーション学の研究でどのようなテーマをPAC分析で研究することができるのでしょうか？ 筆者はこれまで、日本人と華人の面子とコミュニケーション

5 カウンセリングでフォーカシングと呼ばれています（池見, 1995）。

(末田・蔡, 1998, 1999), 留学前と帰国後の滞在国のイメージの変化と異文化体験(末田, 2001), 帰国子女のフェイス(Sueda, 2002, 2004)などについて研究してきました。また、執筆を指導した論文としては、NPOでの異文化体験とアイデンティティの関係について探索した論文(岩波, 2004)や留学体験の意味づけが帰国後の成長に与える影響について探索した論文(原田, 2005), 仕事と育児に従事する女性の時間についての意識に関する論文(伊東, 2006), 教師の自己開示に関する論文(松居, 2008), フェイスの相互作用を留学生のクラスを通して論じた論文(横溝, 2009)などがあります。このように、PAC分析で実施できる研究は多岐にわたっていますが、PAC分析でなくても可能な研究とPAC分析でなくてはできない研究を判断することが大切です。この点は4.でもうすこし詳しく述べます。

本節では、筆者が沼田美南さん⁶を研究参加者として「大学生の高齢者に対するイメージ」というテーマで2010年7月15日に実施したPAC分析のデータを示しながら説明してみます。沼田さんは、自分もその一員である大学生が高齢者に対してどのようなイメージをもっているのかということに興味を抱き、それを卒業論文のテーマとしました。そして、高齢者が身の回りにいて頻繁にコミュニケーションを行っている大学生と、高齢者とコミュニケーションする機会をもたない大学生とでは高齢者に対して抱くイメージはどのように違うかを探索したいと考えていました。

PAC分析に関する文献を読んだうえで、その理解を助けるために、沼田さんを研究参加者として、筆者はPAC分析を実施しました。

3.1.2. 研究参加者のサンプリング

PAC分析では、研究目的に合った研究参加者を選ぶことが重要です。これは、合目的なサンプリングです。今回は、沼田さんのように高齢者が身の回りにいて頻繁にコミュニケーションを行っている大学生と、それと対照的な研究参加者つまり高齢者と普段あまりコミュニケーションを行っていない学生を選ぶことが研究目的に合っています。また、社会福祉学部などで実際に高齢者を介護する仕事に就こうとしている学生を選ぶことも考察を広げてくれるかもしれません。筆者自身は研究参加者を選ぶときに、PAC分析をすることで自己に対する気づきを得たりするなど自らベネフィットを感じてくれる人に実施することを心がけています。

3.2. 刺激文による自由連想

内藤(2002, 2008)が述べるとおり、刺激文は大変重要なので十分練りこまなければなりません。似たような刺激文をいくつか用意して、どの刺激文が一番わかりやすいかの判断を筆者は研究参加者に委ねています。今回も同じプロセスを経て、以下のような刺激文を用意しました。

あなたが高齢者と接している、あるいは、高齢者を見ている場面を思い浮かべてください。その場面について、その場の気持ちやその場とったお互いの行動を含めて意味あるものや重要なものとして、どのようなことばやイメージが浮かんでくるでしょうか。思いついた順に、順位の番号をつけてカードに記入してください⁷。

6 沼田美南さんは2010年7月現在青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科末田ゼミの4年生です。データ公開を許可していただき、心から感謝申し上げます。匿名の必要はないということでしたので、貢献を明らかにするためにここに実名で公開させていただきます。

7 内藤(2002, 2008)にもあるとおり、刺激文はなるべく個人的なものを引き出せるように、「あなたにとって」などということばを入れることがふさわしいようです。

この刺激文から連想されることばを、思いつく限りあげてひとつのカード⁸にひとつずつ連想したことばを書いてもらいます。

3.3. 重要順位・直感的イメージの近さの測定

表 19-1 連想項目一覧

重要順	項目	想起順
1	さみしそう	1
2	批判的思考になりがち	2
3	見て見ぬふり	3
4	よく喋る	4
5	そわそわしてる	5
6	人に気を遣う	6
7	感受性豊か	7
8	地味な服装	8
9		
10		
11		
12		

沼田さんは上記の刺激文で8つの項目を連想し、それを想起順にカードに書きました。次に、想起順に並んでいるカードを、今度は重要順位で並べてもらいました。そのカードは表 19-1 のとおりです。想起した順番と重要な順番はかならずしも同じではありませんが、沼田さんの場合は、想起した順番と重要度が一致しました。

次にこの8項目の組み合わせを直感的イメージがどのくらい近いかで評定してもらいます。評定は「非常に近い」(A)、「かなり近い」(B)、「いくぶんか近い」(C)、「どちらともいえない」(D)、「いくぶんか遠い」(E)、「かなり遠い」(F)、「非常に遠い」(G)の7段階で行います。このとき、ことばの辞書的な意味ではなく、直感的なイメージであるということを伝えます。なお、A～Gの代わりに1～7を使って評定させても構いません⁹。

3.4. デンドログラム (樹状図) の析出

それぞれの項目の組み合わせの評定を、HALWIN¹⁰の「距離行列」と「ワード法」のクラスター分析かSPSS¹¹を用いてデンドログラム (樹状図) を析出します。HALWINで析出したデンドログラムは図 19-1 のとおりです。

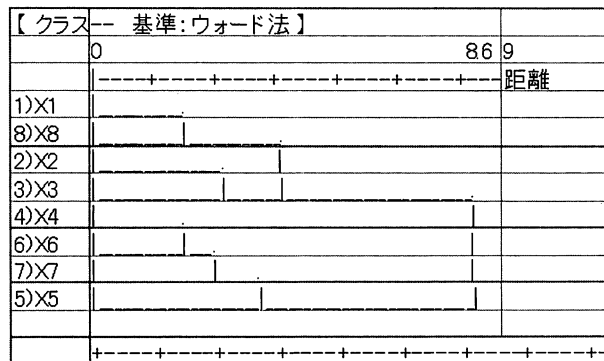


図 19-1 HALWIN で析出されたデンドログラム (沼田さん)

8 カードは市販のものでも、反古を利用してつくったものでもよいでしょう。
 9 HALWIN で直接打ち込むときにはとくに1～7のほうが便利です。
 10 HALBAU/HALWIN の最新版 HALBAU7 (シミック株式会社)。
 11 HALWIN と SPSS の出力形式や演算順序の違いについては内藤 (2008) を参照してください。

3.5. デンドログラム解釈のプロセス

デンドログラムが析出されたら、そのデンドログラムに項目を書き込み、そのコピーをとって研究者と研究参加者が一部ずつデンドログラムをもちます。ここから研究者が研究参加者にインタビューしながら、クラスターを解釈していきます。インタビューは研究参加者の承諾のもと、ICレコーダなどで録音するとよいと思います。とくにUSB内蔵のものはパソコンにも音声も保存できるのでおすすめしたいと思います。

3.5.1. クラスターのわけ方の判断

まず、研究者がクラスターのわけ方の可能性を提示し、研究参加者にいくつのクラスターにわかれるかを聞きます。いくつのクラスターにわけられるかを判断する際に、右側の垂線で切ってみて判断していきます（図19-2）。ただし、最終的に総合解釈する過程で研究者が研究参加者のクラスターのわけ方を変えることもあり得ます。

1番右側の垂線でわけると2つのクラスターに、2番めの垂線でわけると3つのクラスターに、3番目の垂線でわけると4つのクラスターにわかれます。沼田さんの場合は、4つのクラスターで分析していくことで了解しました。

クラスターのわけ方を踏まえ、テキストファイルで保存したデンドログラム（図19-1）をExcelで加工して作成したのが図19-3です。

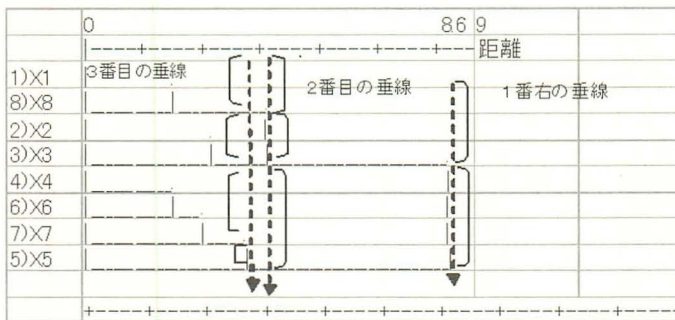


図 19-2 クラスターのわけ方

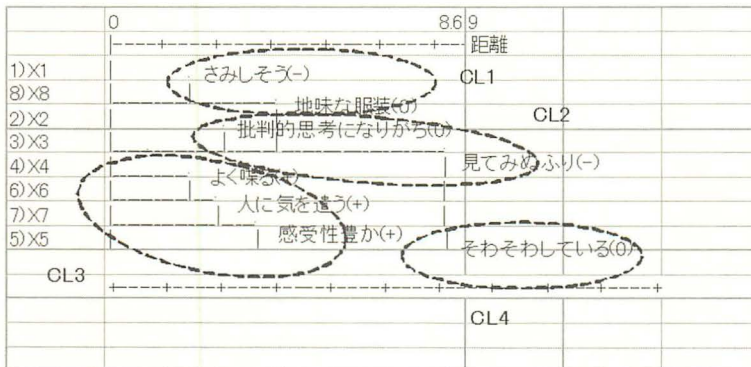


図 19-3 EXCEL で項目やクラスターを入れたデンドログラム（沼田さん）

3.5.2. 研究参加者の解釈

① 研究参加者への質問項目

研究参加者の解釈は、1. クラスターごとのイメージ、2. クラスターごとにまとまってい

る理由¹²、3. クラスター間の比較 (類似点・相違点など)、4. クラスター全体の関係、5. 補足質問、6. 各項目の (+), (-), (0) の評定, という順で進みます。

PAC分析では、3.6.でも述べますが、質問の投げかけ方が難しいと思います。内藤(2002)に倣い、沼田さんにどのような質問を投げかけたのか項目ごとに示してみましよう。

1. クラスターごとのイメージを問う質問

質問1-1: 上からみて、「さみしそう」、「地味な服装」の2項目が1つのグループにまとまっているようですが、このグループからどんなイメージが浮かんできますか? どんな内容でまとまっていますか?

質問1-2: 上からみて、「さみしそう」、「地味な服装」の2項目が1つのグループにまとまっているようですが、このグループにコピー (コピーライターがつくるような) をつけるとするとどのようなコピーがつけられますか?

2. クラスターごとにまとまっている理由を問う質問

質問2: 今度は上から2番目のグループをみてください。「批判的思考になりがち」と「見てみぬふり」の2項目が1つのグループにまとまっているようですが、このグループはどんな理由でまとまっていると思いますか?

3. クラスター間の比較 (類似点・相違点など)

質問3-1: それでは、1番目のグループ「さみしそう」「地味な服装」と、2番目のグループ「批判的思考になりがち」「見てみぬふり」とを比べてみてください。どのようなところが同じでどのようなところが違いますか?

質問3-2: (3-1を投げかけてさらに出てきそうなとき) 他にはどうですか?

質問3-3: 2番目のグループ「批判的思考になりがち」「見てみぬふり」と3番目のグループ「よく喋る」「人に気を遣う」「感受性豊か」は色で喩えるとそれぞれ何色ですか?

質問3-4: 3番目のグループ「よく喋る」「人に気を遣う」「感受性豊か」と4番目のグループ「そわそわしている」は温かさや寒さでいうとどうですか?

4. クラスター全体の関係

質問4-1: 1番, 2番, 3番, 4番の全体をみたときどんなイメージが浮かんできますか?

質問4-2: 1番, 2番, 3番, 4番の全体をみたとき、どのような関係になっていると思いますか?

5. 補足質問

質問5-1: 1番上の「さみしそう」というのは、誰のことですか?

質問5-2: 次の「地味な服装」って?

質問5-3: 「批判的思考になりがち」というのは何にあるいは誰に対してですか?

質問5-4: 最後の項目の「そわそわしている」って、誰がそわそわしているんですか?

12 クラスターごとのイメージは研究参加者が感性で答える問いですが、理由は理性で答える問いです。感性から理性の順番に問うのは内藤先生が提示する順であるだけではなく、異文化トレーニングのディブリーフィングの手法での考え方とも合致しています。異文化トレーニングでは、能動的なアクティビティの後、その学びをまとめるディブリーフィングを行います。そのとき必ずどう感じたかを先に問い、その後どう考えるか説明するよう促します。先に理性に訴える質問をしようとして、感性に訴える質問は答えるのが難しくなるからです。

6. 各項目の (+), (-), (0) の評定

質問6-1: それぞれの項目を一つひとつ取り上げたときに、どのようなイメージが浮かんでくるのでしょうか? プラス、マイナス、どちらともいえないのゼロのうちどれでしょうか? 感覚として感じてくるものを答えてください。

以上、沼田さんに実際に投げかけた質問を書いてみました。これ以外にもいろいろな質問の内容があると思いますが、沼田さんがなるべく自分のイメージを感じることができるように質問3-3や質問3-4のように質問しました。幸い、沼田さんに対して筆者は防衛的などを感じることなく、沼田さんが感性で高齢者に対するイメージを捉え、その後で理性で考えている様子が見えました。

一方、自分の気持ちに向き合うのに抵抗があり、「なんでこんなこと聞くの?」と言わんばかりの防衛的な研究参加者もいます。このような場合に、徐々に色や温かさや硬さなどについて尋ね、どのような感覚に訴えることで研究参加者が感性を働かすか試してみるのもよいと思います。そこが突破口になって、その後のインタビューの流れがスムーズになると思います。

②研究参加者への質問の仕方の注意点

質問の内容 (what) はもちろんですが、どのように (how) 聞くかは PAC 分析においてとても大切です。それでは以下に、内藤 (2002, 2008) を参照し、また内藤先生から直に学んだことや、PAC を実践しているなかで学んだことを踏まえて、どのように質問するかについての重要なポイントをあげてみましょう。

ポイント1: ゆっくり聞く。

通常のインタビューでも同じことがいえると思いますが、PAC 分析を実施するようになって筆者は自分がまるで何かの取調べのような聞き方をしていることに気づかされました。研究者が早口で問いかけたら、研究参加者はゆっくり考える心の余裕を失ってしまいます。いつもよりゆっくり話すことを心がけましょう。

ポイント2: 研究参加者が答えるのをゆっくり待つ。

ポイント1と同じように、研究参加者がデンドログラムを十分解釈できるように、答えるまでに十分な時間を与えましょう。「どうなの!?!」というような研究参加者を焦らせるような催促は禁物です。かといって、「これ以上考えつかない」と言っている研究参加者をじっと待つのもどうでしょうか? 研究参加者の居心地を悪くさせない程度に間をおきましょう。

ポイント3: 五感を駆使して研究参加者の非言語メッセージにも注意を払う。

ポイント2で「研究参加者の居心地を悪くさせない程度に」と述べましたが、待つタイミングや先に進むタイミングを知るにはそれにはどのようなことに注意すればいいのでしょうか? そのためには、研究者が五感を駆使して研究参加者の非言語メッセージ (顔の表情、語気、視線、表情音声など) も敏感に察知することが求められます。

また、言いよどんだり、声の調子が速くなったり、声が弾んだりすることから、研究参加者の何らかの感情の起伏が読み取れます。そこは記録するなどしておけば、考察するときに一助となるでしょう。

ポイント4: オープンエンドの質問を心がける。

研究参加者が何かを漠然と感じているようですが、それを焦点化できていないという場合には、焦点化を促すように質問していきます。研究参加者が言った意味の一つひとつ確認していただだけでも、かなりイメージが膨らんでくることがあります。たとえば、「3番めと4番めは間逆だと思います」と研究参加者が言った場合、「間逆って?」と相手の使ったことばを繰り返すだけでもかなり多くのことが引き出せます。

また、研究参加者の思考を促すことで、研究者自身もつ意味世界と研究参加者の意味世界は同じことばを言っているのにかなり違うと認識することが大切なのではないでしょうか。

3.6. 研究者による考察

これまで3.5. でみてきた研究参加者の解釈をもとに、今度は研究者が総合的にデンドログラムを分析していきます。総合的解釈の記述の仕方は、章末の研究例を参照してください。

考察するためには、録音している場合は、何度も聞き返したり、書き取ったものを読み返したりして聴き取ったことを心で感じとることが重要です。そのためには、まずは「あるがままの描写」(内藤, 2002, p. 52) をこころがけます¹³。たとえば、以下は、沼田さんと私が補足質問で特定の項目について問いかけている様子の録音データを書き取ったものの抜粋です。

末田: 「よく喋る」って?

沼田: 私とかと～～高齢者の方がしゃべると～～、いったん壁が取れると・・・いい天気ね・・・から始まって・・・自分の過去の話とか、だんなさんが亡くなって今は一人で暮らしているとかって話をば一つと話すイメージがあって・・・。私にだけではなくて、高齢者の人同士でも、多分仲がいいんだろうと思うんですけど、仲がいいとばあ一つと喋っていて・・・その一方で、一人で座っている高齢者の方は静かで・・・打ち解けるとすでい喋る・・・それは誰でもそうかもしれないんですけど・・・そのギャップが凄いなって(かすかに微笑んで) 思いました¹⁴。

(中略)

末田: 「そわそわしてる」?

沼田: なんかいつもせわしなくしているような気がするんですよね・・・人よりなんか準備するのが早かったりとか・・・またこれ、バスでの出来事なんですけど～～バスは座ってて止まるときに、止まってから立ってくださってアナウンスが流れるんですけど、高齢者の方は止まる前に立ってて・・・(クスッと笑うかんで) 危ないなって思うんですけど・・・。そういう場面を何回もみて、準備が早いなって、なんだろう・・・。。。。お財布とか出すのも凄い早い気がするし、行動が早い。自分が高齢者になったときにわかるかもしれないんですけど、人に迷惑をかけないために自分が遅くならないように気

13 内藤先生に個人レッスンを受けた1995年に、私を研究参加者として実施して下さったPAC分析の記録をみて驚きました。先生はまったく録音なさいませんが、綿密なノートをとっていらっしゃいました。私の非言語メッセージに聞しても記録なさっていて、その緻密さは神業だと思いました。

14 ここで、～～は声に高低をつけながら語尾を伸ばしている部分で、・・・は沈黙している部分です。

を遣っているのかなって・・・でそわそわしているってイメージです。

こうした聴き取りや書き取りを繰り返し、データと繰り返し向き合います。そしてその後感じたことから一步離れて、考察を試みます。デンドログラムを感性で捉えることができるのは何とんでも研究参加者ですが、だからといってそれを構造的に把握できるかどうかはわかりません。クラスターのわけ方を判断し、クラスターに命名するという重要な仕事は最終的には研究者に委ねられています。研究参加者の解釈を参考にしながらも、研究者がクラスターを命名することができるように研究参加者の意味世界に近づくという役割を忘れてはなりません。研究者はデンドログラムを構造的に把握し、ひとりの研究参加者のデンドログラムの解釈を丁寧にまとめ、さらに複数の研究参加者がいる場合は、その共通項や相違点などに着目して考察していきます。

上記の語りからわかるように、最初は高齢者と沼田さんの間に壁があります。それが挨拶からはじまって話していくうちに、堰をきったように話し始めるといったギャップが語られていきます。沼田さんがもつ高齢者のイメージは、複雑な様相を示していました。沼田さんの抱いていた高齢者のイメージは、地味な色合いの服装でバスを待ち、なんとなく孤独でさびしくもありましたが、一度話して慣れてくるとよく話す姿もあり、若者に対して冷たい目でその行動を見てみぬふりをしている様子も描かれ、そして他人に迷惑をかけないように「ごそごそ」と早めに準備する姿もありました。沼田さんは高齢のご家族ともよくコミュニケーションをしている人ですし、町にでてもなんとなく知らない高齢者と会話をかわす人ですから、高齢者のいろいろな姿をみているのでこのように複合的なイメージが浮かんだのだと思います。ですが、これが身近に高齢者もいない環境に身をおき、あまりコミュニケーションの機会ももたない研究参加者であった場合はどうでしょうか？ また、同じ大学生でも社会福祉学部で高齢者の介護などの職業をめざしている研究参加者の場合はどうでしょうか？ おそらく、沼田さんのデンドログラムとはかなり違う構造をもったデンドログラムが析出されると思います。だとすれば、なぜそのような違いがあるか、そして共通している部分はなにかに着目すると、これまで高齢者と若者のコミュニケーションに関して議論されていなかった要因がでてくるかもしれません。

4. PAC 分析を採用する意義と課題

4.1. PAC 分析をコミュニケーション研究に採用する意義

PAC 分析を援用することによって、他の方法では困難なテーマにも取り組むことができると思います。以下に PAC 分析をコミュニケーション研究に採用する意義について、3 点に絞ります。

まず、「コミュニケーションはプロセスである」(末田, 2003, p.19) ということばを皆さんは聞いたことがあると思います。これがコミュニケーションの大きな特徴であるにもかかわらず、実際にこの特性をどのように研究するかはとても難しいのです。ですが、筆者は PAC 分析ではコミュニケーションのプロセスを捉えることが可能だと思います。たとえば、末田 (2001) にあるように、日本人留学生の滞在国のイメージを留学する前と帰国してから 2 回 PAC 分析を実施することでイメージの変化をみることができました。同じように、原田 (2005) は、海外体験者の経験を帰国直後、帰国して数ヶ月、帰国して 1 年後というように時系列で捉えることで、イメージの変化をみましました。また、横溝 (2009)

は、同じ教室にいる留学生のひとりひとりのフェイスニーズをPAC分析を含む他の方法との併用で探求しました。それによって同じ場を共有してどのような相互作用が起こっているのかを探索することができました。

2点めは1点めにもつながりますが、ある場や状況を共有する人たちの視点を複眼的に捉えることができるということです。たとえば、対人コミュニケーションで二者間のコミュニケーションというコンテキストはたくさんあります。夫婦、きょうだい、先輩と後輩、友人同士、上司と部下などあげればきりがありません。どの二者を取り上げたとしても、その二者がお互いの関係性についてどのように考えているのか、またお互いのコミュニケーションについてどう思っているのかについてPAC分析を実施することで二者間の関係性や相互作用について多くの知見を得ることができるでしょう。

3点めは、メタのレベルで、PAC分析はまさに研究者や実践者としてのコミュニケーション能力が言語の面でも非言語の面でも試される方法だということです。なぜなら、研究者には、研究参加者のことばに傾聴し、先入観にとらわれずにその意味世界を理解することや、非言語メッセージが発する研究参加者の感情的機微を読み取ることが求められるからです。

4.2. 課 題

4.1 であげた意義とともに、PAC分析をコミュニケーション研究に採用するには課題もまたあります。

まず、PAC分析を行うためには、その手続きにかなりの時間を要するので、研究参加者に時間的余裕と協力の意思やコミットメントがないと実施が難しいという点です。個人差があると思いますが、これまで筆者が実施した例では1回のPAC分析に1時間から3時間の時間を所用しました。

2点めは、研究参加者の潜在的な意識が出てくることや、それは本人も予期しない形ででてしまうこともありうるということです。調査の倫理に十分配慮する必要があります。

3点めは、PAC分析をする前に、本当にPAC分析を使う必要があるかどうか?と自問してみることが賢明です。PAC分析が論文執筆のための簡便なツールであってはならないと、内藤(2008)は以下のように述べています。

…PAC分析を用いると、実験計画法や統計についての知識がなくても、面接調査の経験がなくても、形式的・機械的に統計ソフトを使用して、被検者に問いかけながら曲りなりにも質的分析ができる。しかし現実には、変数も仮説も、理論の生成すらも、全て被検者任せ、運任せで、クラスター構造は検査者の事前のイメージに合わせて読み取り、被検者の言葉は自分の見解に合うところだけ繋ぎ合わせて解釈し、結論を導き出している人さえいる。(p.2)

どのような研究手法もそうですが、使う目的に合わせて、ふさわしい使い方をすることが大切です。どの道具も使いようです。そして道具の使い方を覚えたからといって、その道具を振りかざすようであってはならないと思います。どのようなところでPAC分析を使うべきか、他の方法でもできるのか、それを十分考慮して使いましょう。

引用文献

- 原田満里子 (2005). 留学体験の意味づけが帰国後の成長に与える影響：PAC 分析解釈における体験過程スケールの適用を通じて 青山学院大学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻修士論文
- 池見 陽 (1995). 心のメッセージを聴く 講談社
- 井上孝代 (1998). カウンセリングにおけるPAC (個人別態度構造) 分析の効果 心理学研究, **69**, 295-303.
- 伊東希保 (2006). 仕事と育児に従事する女性の時間意識 青山学院大学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻修士論文
- 岩波華乃 (2004). NPO 異文化体験の意味づけ：心的変容とその後の影響：国際教育団体Up With People 参加者のPAC 分析を通して 青山学院大学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻修士論文
- 松居佐弥 (2008). 生徒との関わりにおける教師の自己開示：役割意識との関連性に着目して 青山学院大学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻修士論文
- 内藤哲雄 (2002). PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待 (改訂版) ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 (2008). PAC 分析を効果的に利用するために 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一 (編) PAC 分析研究・実践集1 ナカニシヤ出版 pp.1-33.
- 末田清子 (2001). 留学体験の意味づけ：大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して 異文化コミュニケーション, **4**, 57-74.
- 末田清子 (2003). コミュニケーションとは何か 末田清子・福田浩子 (編) コミュニケーション学：その展望と視点 松柏社 pp.13-22.
- Sueda, K. (2002). *Shame and pride behind face: Japanese returnees negotiation of multiple identities*. Ph.D. thesis presented at the University of Lancaster, UK.
- Sueda, K. (2004). Shame and pride as the master of negotiating identities: An analysis of triangulated research with Japanese returnees. *Human Communication Studies*, **32**, 129-153.
- 末田清子・蔡 小瑛 (1998). 華人の面子・日本人の面子：PAC 分析技法による日本人を対象にした調査の報告 北星論集, **35**, 51-67.
- 末田清子・蔡 小瑛 (1999). 「面子」の多面性に関する一考察：在日台湾人男性のケース・スタディを通して 異文化コミュニケーション研究, **11**, 85-98.
- 横溝 環 (2009). フェイス相互作用理論：留学生間の相互作用から捉えたフェイスワーク 青山学院大学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻博士論文

PAC 分析の研究例

大学生の高齢者に対するイメージ

1. 背景・目的

本研究の目的は、大学生の高齢者に対するイメージを PAC 分析 (内藤, 2002) により構造的に探求することである。

2007 年に日本はついに 65 歳以上の人口が全体の人口の 21% 以上を占める超高齢化社会の到来を迎えた (東京都総務局統計部人口統計課人口動態統計係, 2010 年 1 月 28 日)。このような動向のなかで、メディアによる高齢者のイメージに関する研究 (たとえば荻原・Prieler・Kohlbacker・有馬, 2009) や、高齢者と若者のコミュニケーションに関する国際的比較研究 (e.g., Giles, Hajek, Stoitsova, & Choi, 2010; McCann & Ohta, 2010) や、看護学生を含む大学生の高齢者に対するイメージに関する研究 (たとえば伊藤・住垣・後藤・岩崎・林, 2010; 奥村・久世, 2009) などがみられるようになってきた。

こうした研究の一端が、高齢者との接触の度合いが増すことにより、大学生の高齢者に対するイメージが否定的なものから肯定的なものに好転することを示唆しており興味深い。しかし、大学生の高齢者に対するイメージはつねに二元論的なのだろうか? 桑原・水戸・飯吉 (1997) が指摘するように、そもそも高齢者に対するイメージが肯定的あるいは否定的であるということの意味は十分議論されてはいない。つまり大学生が高齢者と肯定的な関わりをもったから肯定的なイメージをもち、否定的な関わりをもったから否定的なイメージをもっているというわけでもないだろう。

よって本研究により、大学生の高齢者に対するイメージを構造的に探求することは意義があると考えられる。

2. 方 法

青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科 4 年生である沼田美南さんを対象に 2010 年 7 月 15 日、PAC 分析を実施した。沼田さんへの刺激語は以下のとおりである。

あなたが高齢者と接している、あるいは、高齢者を見ている場面を思い浮かべてください。その場面について、その場の気持ちやその場でとったお互いの行動を含めて意味あるものや重要なものとして、どのようなことばやイメージが浮かんでくるでしょうか。思いついた順に、順位の番号をつけてカードに記入してください。

3. 結果と考察

クラスター分析の結果、図 1 のようになった。

3.1. 研究参加者の解釈

①各クラスターのイメージ

(CL1 について)

CL1 は「さみしそう」と「地味な服装」の 2 項目。これは・・・暗いイメージです。

(CL2 について)

CL2 は「批判的思考になりがち」と「見てみぬふり」の 2 項目。見てみぬふりっていう



図1 沼田美南さんのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ

のが、思ったことを、言わないってことなんですけど・・・でも、批判的な思考っていうのはもっているんだろうなあっていうイメージはあって・・・でも直接言わないってことを言いたいんですね・・・(中略) 客観視しているっていうことかな・・・。

(CL3 について)

CL3は「よく喋る」「人に気を遣う」「感受性豊か」の3項目。一見、暗そうだって思うんですけど、喋ってみるとすごい勢いで喋る・・・方が多くて、やっぱり自分が仲がいい人に対してはやっぱり気を遣っている感があるので・・・なんか、そういう・・・まとめると、さっきと逆ですけど、明るい・・・

(CL4 について)

CL4は「そわそわしている」の1項目。ここでは、つねになんかごそごそしているイメージがあって・・・荷物を探していたりとか・・・落ち着きがない感じに見える・・・なんかちょっと急いでいる感じに見える。そんな感じです。

② クラスター間の類似点・相違点

(CL1 と CL2)

似ているのはネガティブなところというか、前向きじゃない感じが似ていて、違うのはクラスター1は孤独な感じがするけど、2の方は社会に目を向けているので、人と関わろうという気があるような気がします。

(CL2 と CL3)

CL2は人と接するまでの高齢者の気持ち的なもので、3は実際壁を破って接した後のことです。

(CL3 と CL4)

3は人に対して明るさとか優しさとかそういうことだと思うんですけど・・・4はせかせかしているのは人に気を遣って努力っていうか、とくに誰に対してってわけではないんですけど4は努力で3は実際、人に対してやっていること・・・

(CL4 と CL1)

1はもう自分自身の問題というか、さみしいのは実際さみしいかもしれないし、服装も自分で決めるから個人の問題のような気がするんですけど・・・4は他人を意識している。地味な服装はあんまり意識してないのかな・・・って思います。

③クラスター全体の関係

一般的には、まあ、みんながそうとは限らないんですけど、高齢者の人は死が近いっていうのもあって、孤独ってというのが大前提にあって、もし家族と一緒に住んでいたとしても、内面には孤独ってというのがあって……。服装ってというのはあんまり関係ないかもしれないんですけど、1番の孤独ってというのが一番下にあって・・・1の上に2があって、自分は孤独なのに・・・って世の中のことを批判的に見るんですけど・・・でもその上には人と関わりたいっていう気持ちがあるんで3があって・・・3と4が並んであるのかな・・・と思います。

④補足質問

「さみしそう」：私が接する高齢者の方ってというのは、自分のおじいちゃんもありますけど、道端であったり、バス停であったりとかしたときにお互い一人で会うことが多いんですけど・・・なんか話しかけられたりするんで、そしてなんかだいたい相手も一人で、だんなさんは亡くなったとか・・・そういう話になるので・・・さみしいのかなあ・・・って。で、私とか他人なのにすごくそういうことを喋ってくるってことは、なんか日常ではそういう会話がなくなっているかなって、さみしいのなくなっている勝手な考えです。

「批判的思考になりがち」：相手はいろいろなんですけど、若者には、なんか、自由にやらせればいいじゃないって言うよりか、私たちの時代とは違うわね！みたいな・・・批判的に若者のことをみていると思うし・・・政治とかに関しても批判的かな・・・って言うイメージがあって。で、そういうところからです。

「よく喋る」：私とかと～～高齢者の方がしゃべると～～、いったん壁が取れると・・・いい天気ね・・・から始まって・・・自分の過去の話とか、だんなさんが亡くなって今は一人で暮らしているとかって話をば一つと話すイメージがあって・・・。私にだけではなくて、高齢者の人同士でも、多分仲がいいんだろうと思うんですけど、仲がいいとばあ一つと喋っていて・・・その一方で、一人で座っている高齢者の方は静かで・・・打ち解けるとすごい喋る・・・それは誰でもそうかもしれないんですけど・・・そのギャップが凄いなって（かすかに微笑んで）思いました。

「そわそわしてる」：なんだかいつもせわしなくしているような気がするんですよ・・・人よりなんか準備するのが早かったりとか・・・またこれ、バスでの出来事なんですけど～～バスは座ってて止まるときに、止まってから立ってくださってアナウンスが流れるんですけど、高齢者の方は止まる前に立ってて・・・(クスッと笑うかんじで) 危ないなって思うんですけど・・・。そういう場面を何回もみて、準備が早くなって、なんだろう・・・お財布とか出すのも凄い早い気がするし、行動が早い。自分が高齢者になったときにわかるかもしれないんですけど、人に迷惑をかけないために自分が遅くならないように気を遣っているのかなって・・・でそわそわしているってイメージです。

3.2. 研究者の総合的解釈

沼田さんの調査の結果は図1のとおりである。連想項目8項目のうち、(+) (プラス) 項目は3項目、(-) (マイナス) 項目は2項目、(0) (ゼロ：プラスでもマイナスでもない) 項目は3項目で、全体としてプラスとマイナスが錯綜するイメージとなっている。

CL1は「孤独」、CL2は「拗ねて見てみぬふり」、CL3は「人との温かい関わりへの切望」、CL4は「迷惑の回避」と命名できよう。CL1には、暗いトーンの服装をした高齢者潜在的

な孤独が表れている。そしてCL2にはその孤独が故に拗ねて、世間を冷めた目で客観視している高齢者の姿がイメージされている。しかし、その先にはCL3に表れている「人との温かい関わりへの切望」であり、だからこそ関わるべき人たちに迷惑をかけたくないという気持ちがCL4に表れている。公共の場であっても私的な場であっても、迷惑をかけたくない気持ちからつい「そわそわして」必要以上に早めに物事を準備する高齢者の姿が映し出されている。

このデンドログラムが表すイメージの複雑性は少なくとも以下の2つの観点から大変興味深い。まず、それは沼田さんが、日常的に高齢者とコミュニケーションをとっていることから、高齢者のイメージが複雑なものになっていると考えられる点である。今後沼田さんと相反する学生、つまり日頃高齢者とコミュニケーションする機会がない学生や、高齢者の介護職を志向する学生にもPAC分析を実施し、そのイメージの構造を比較することが望まれる。

2点めは、ここで表れているイメージは人間が誰でももつ複雑なフェイスニーズ(Sueda, 2002)を浮き彫りにしているということである。CL1の孤独というのが高齢者のもつ大前提であり、この孤独がフェイスニーズの複雑さを顕著なものにするのであろう。CL2は「他者に迷惑をかけられたくない」というニーズの表れと考えられる。目にあまる世の中の有様をみるにつけ、それに巻き込まれて迷惑をかけられたくないという欲求が高齢者にはある。CL3はその一方で、誰かに関わってほしいし、自分も関わりたいというニーズがみえている。つまり、「他者に受け入れられたい」というニーズと「他者を受け入れたい」というニーズが補完しあっている。またCL4には、「他者に迷惑をかけたくない」というニーズと「他者に受け入れられたい」ニーズが共起している。これは、「他者に受け入れられたい」からこそ「他者に迷惑をかけたくない」と望むとも解釈できよう。

このようにある種類のフェイスニーズが別の種類のフェイスニーズが生起する条件や動機になったりするのは、フェイス研究のなかで着目すべきことである。ただし、ここで論じていることはあくまで大学生の目からみた高齢者のイメージであり、今後は高齢者を研究参加者としてPAC分析を実施することも必要である。

4. まとめと今後の課題

高齢者に対する大学生のもつイメージについては、研究されてはいるものの、これまでの研究は肯定的・否定的などという二元論的な議論に集約されていた。しかし、本研究が明らかにしたように、高齢者と日頃接触の多い沼田さんについては、高齢者に対して肯定的なイメージと否定的なイメージが錯綜していることがわかった。今後、別の研究参加者を対象としてPAC分析を実施し、研究参加者の高齢者との関わりや深度と高齢者のイメージの構造との関連について考察することが肝要だと思われる。

また、前述のとおり、高齢者に対するイメージや高齢者とのコミュニケーションのあり方などは研究されてきたが、高齢者のもつフェイスの概念に特化した研究はまだ過少である。高齢者のもつフェイスの概念やニーズに関する研究を蓄積することは、高齢者とコミュニケーションを行うにあたって実践的にも一助となるであろう。

引用文献

- Giles, H., Hajek, C., Stoitsova, T., & Choi, C. W. (2010). Intergenerational communication satisfaction and age boundaries in Bulgaria and the United States. *Journal of Cross Cultural Gerontology*, 25, 133-147.
- 伊藤豊美・住垣千恵子・後藤友美・岩崎孝子・林 稚佳子 (2010). 老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化 国立看護大学校研究紀要, 9(1), 37-42.

- 桑原洋子・水戸美津子・飯吉令枝 (1997). '老人観'に関する研究の問題 新潟県立看護短期大学紀要, 2, 47-58.
- McCann, R., & Ohta, H. (2010). Inter-Asian variability in age graded communication: The role of respectful and avidant communication across and within age groups and cultures. Paper presented at ICA pre-conference at Meiji University on June 20, 2010.
- 内藤哲雄 (2002). PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待 (改訂版) ナカニシヤ出版
- 荻原 滋・Prieler, M.・Kohlbacker, F.・有馬明恵 (2009). 日本のテレビCMにおける高齢者像の変遷 メディア・コミュニケーション, 59, 113-129.
- 奥村由美子・久世順子 (2009). 大学生の高齢者イメージに関連する要因: 認知症高齢者と健常高齢者のイメージ比較 日本福祉大学健康科学論集, 12, 31-38.
- Sueda, K. (2002). *Shame and pride behind face: Japanese returnees negotiation of multiple identities*. Ph.D. thesis presented at the University of Lancaster, UK.
- 東京都総務局統計部人口統計課人口動態統計係 (2010). '高齢化'を示す指標 東京都総務局統計部人口統計課人口動態統計係 2010年1月28日<<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/jsuikai/js-index5.htm#skip0>> (2010年9月16日)